陳舜臣さんを語る会通信

NO.50　Oct.　2021

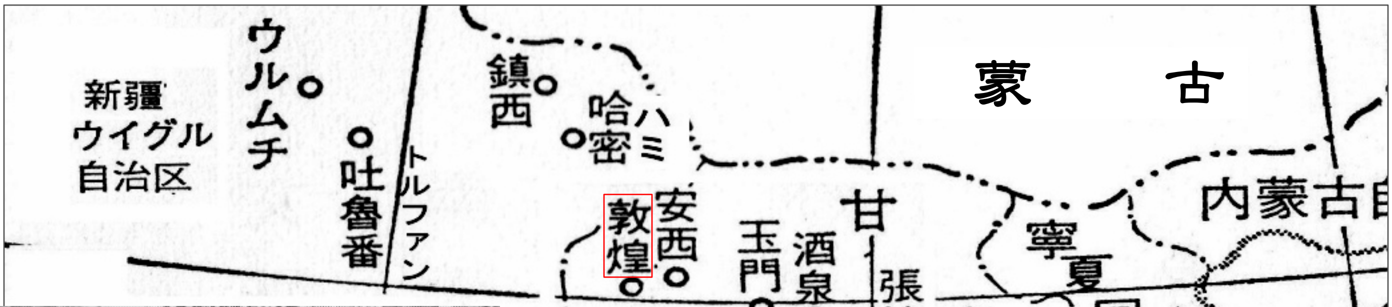
発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2021年10月20日

1975年、家族4人の『敦煌の旅』(第3回大佛次郎賞受賞)

陳舜臣さんは、1972年の親戚訪問にはじまり、ざっと数えて27、8回、中国旅行をされていますが、その内、敦煌やウルムチほか、甘粛(かんしゅく)省＆新疆(しんきょう)ウイグル自治区への旅が下表の通り８回あります。特に最初の10年は、憑(つ)かれたようは頻度です。その内、今回は「敦煌の旅」を取り上げました。　（編集委員　橘雄三）

陳舜臣さん、甘粛省&新疆ウイグル自治区への旅

	年	月	旅　程
	1972	10	国交が回復すると、日本赤十字社が発行する証明書による探親という形で、母に同道、弟・介臣も同行、初めて中国へ行く。日中間の空路がまだ開かれていなかったので香港から入る。北京では、1953年、祖国建設の情熱に燃えて中国に渡り、当時、北京放送勤務だった妹の妙玲に会い、西安では半坡(はんぱ)博物館を訪ねたりした
1	1973	8~9	家族4人(ご夫婦、立人さん、由果さん)の旅。この旅を機に中華人民共和国籍取得。以後、台湾に入れなくなる。新疆行きを希望するが北京で足止め(この辺りの状況は『新西遊記』の冒頭に詳しい)。ところが、中日友好協会会長の廖承志(りょうしょうし)の口ききで秘書の孫平化(そんへいか)が動いて旅行は実現。西安、蘭州、ウルムチ、トルファンほか
2	1975	8	前回に続き、家族4人の旅。北京空港から西安経由で蘭州へ。蘭州から夜行列車で酒泉へ。酒泉からジープで嘉峪関(かよくかん)、玉門鎮、安西を経て敦煌へ。『敦煌の旅』はこの旅行を描く
3	1977	7	「シルクロードの旅」の取材。ウルムチから小型機でコルラ、クチャなどを経てカシュガルまで飛び、カシュガルからホータンまで西域南道520キロをジープで16時間かけて走る。北京に戻り、病院で鍼を打ってもらうが、そこで「子夜(しや)」などで知られる作家茅盾(ぼうじゅん)に出会う
4	1979	10	「天竺への道」の取材。トルファン、クチャ、キジル、大龍池などを歩き、カシュガル、パミールとタシュクルガンの間を谷を縫って往復
5	1980	8後半	NHK「シルクロード」取材。北京~ウルムチ(空路)、ウルムチ滞在、ウルムチ~トルファン(陸路)、トルファン滞在(高昌故城、ベゼクリク千仏洞、トルファン盆地、交河故城などを取材)、トルファン~ウルムチ(陸路)
6	1981	9末~10	北京、ウルムチ、南山、イーニンなどを回り、カシュガルでは回教徒最大の年中行事、クルバーン祭にめぐり会う
7	1984	8	加藤周一らと敦煌の莫高窟(ばっこうくつ)へ仏像を見に行く
8	1996	4~5	中国に遊び、敦煌を訪れる



前列左から陳舜臣さん、由果さん、立人さん。後列左から二人目、陳舜臣夫人。敦煌石窟寺前で

『敦煌の旅』章立てと要約

《1.平凡社『敦煌の旅』(1976)》

こちらは、旅の翌年、平凡社から発行されたもので、陳舜臣さんの令息・立人氏撮影の旅の風景や敦煌の壁画など、豊富な画像があって、理解・想像を大いに助けてくれます。

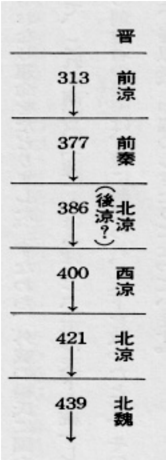
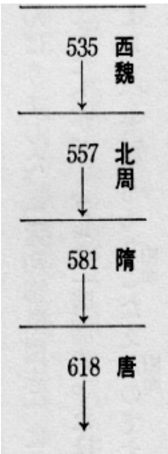
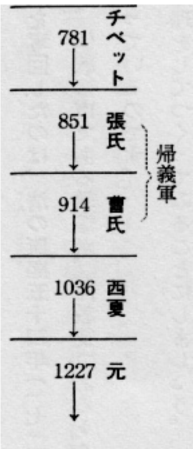
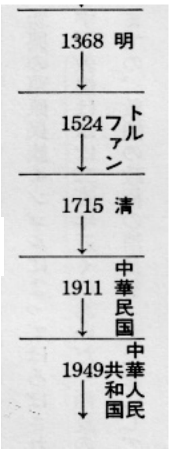
『敦煌の旅』は下記枠内の通り15の章で成り立っています。

《2.読売新聞社『敦煌の旅』(1995)》

こちらは、シリーズ、西域シルクロード全紀行の一冊として発行されたものです。画像は、一枚、口絵写真があるだけです。

内容は、15の章の前に、平凡社の本にはない、「巻頭のうた」と「巻頭のことば　敦煌以前のこと」が付いています。

『敦煌の旅』章立て

酒泉にて	まず最初は、1973年の旅のとき、酒泉空港の女性服務員から聞いた酒泉という地名の由来譚です。この話には、李陵の祖父、李広将軍が登場します。次は、1933年、酒泉に軍兵を集め新疆に攻め込んだ回教徒の青年将軍・馬仲英の事件です。そのあと、天竺求法の僧・玄奘、新疆へ左遷されたアヘン戦争の立役者・林則徐に言及、また、「葡萄の美酒 夜光杯」と詠った王翰(おうかん)が語られます。最後は、出発前の早朝、酒泉県夜光杯廠(しょう)を見学した話です
嘉峪関を越えて	万里の長城の西端、嘉峪関城を遠望するところでジープを停め写真撮影。この辺りは沙漠と言っても、石ころの多い砂礫(ゴビ)の原ですが、白っぽい草が点々と見えます。ここで、陳さんは、「白草」を詠った岑参(しんじん)、王昌齢(おうしょうれい)、王維などの詩を列挙します。あと、再び林則徐です。「嘉峪関を出でて感ずるの賦」と題する詩をとりあげ、共感、陳さんは目頭を熱くします。更に、玉門鎮で、林則徐の「塞外雑詠」から一首紹介し、これに和して作った陳さん自作の詩も披露されます。
塞外風光	四十年前の話として、張国燾(こくとう)率いる中国共産党第四方面軍の悲劇を詳述します。次は、昔この地にあった橋湾城にまつわる、案内人老劉の語りです。清の乾隆帝が夢に名城を見て、「橋湾城」を造らせるのですが、築城を命じられた大臣が業者から賄賂を取り、それがバレて、皮膚を剥がれ太鼓に作られ、城の櫓にぶら下げられ、朝晩、打たれたという話です。ジープが唐代の「玉門関」のあたりを過ぎるとき陳さんは、玉門関を詠った李白の詩二首を紹介します。続いて、話は玄奘法師に及び、また、ここでも、林則徐が登場します。この章の最後にもう一度、紅軍の凄惨は戦いのはなしが出てきます。陳さんは紅軍に同情的です
鳴沙山へ	安西で大休止の後、敦煌へ向かいます。まず、大谷探検隊の橘瑞超、スウェン・ヘディンが少しふれられます。陳さんは、「私は心のなかで、ひそかに林則徐と旅をしていたのです」と記しています。その通り、三度、林則徐が登場します。林の日記や「塞外雑詠」の詩が紹介されます
敦煌の歴史 敦煌を支配した国・勢力	月氏 ↓ 前176頃 匈奴 ↓ 漢武帝 河西四郡 ↓ 後漢 ↓ 三国 ⇨  ⇨  ⇨  ⇨ 

前夜
交脚菩薩
阿修羅
古寺残影
石窟寺の午後
秘宝顚末
文殊洞
南大仏
胡旋舞
帰路
あとがき

「前夜」、この章からいよいよ敦煌です。「交脚菩薩」からは、石窟のようすや壁画、そしてそれにまつわる話が詳述されます。ここから、要約は略します。直接、陳さんの文章でお楽しみ下さい。

culturecity2020-kitakyushu.com より 「敦煌俯瞰」→

仏教経典を石窟にかくす場面、井上靖『敦煌』と比較してみましょう

主人公・趙行徳が仏教の経典を敦煌の石窟にかくすくだりです

敦煌といえば、井上靖『敦煌』（一九五九）を思い浮かべ、続いて、佐藤浩市扮する、科挙の受験に失敗した主人公・趙行徳、西田敏行扮する西夏軍の漢人部隊隊長・朱王礼、渡瀬恒彦演じる西夏の若き指導者・李元昊（りげんこう）などが登場する映画『敦煌』を連想します。これら登場人物に、回鶻（ウイグル）の王族の女が絡みストーリーは展開します。

ヤマ場は、朱王礼が死を覚悟し、李元昊に挑むくだりです。王礼は行徳に守城を命じ、自らは沙州城から撃って出ます。すでに瓜州城は炎に包まれ、やがて沙州城にも戦火が及ぶでしょう。一刻の猶予もありません。行徳は、荷物は沙州太守曹氏が何代にも亘って蓄えた財宝だと偽って交易商人・尉遅光（うっちこう）を騙し、仏教の経巻を駱駝に積み、千仏洞へ運ばせます。

『敦煌』から引用します。

「ここに穴がある」

穴は大体十尺四方ぐらいの正方角をなしていて、四方は壁で塗り上げられてあった。ここが半成品の耳洞であることは、北側の壁だけに絵が描かれてあるのでも判った。燈火で照らしてみると、僧侶と近仕の女らしい人物が、それぞれ対かい合って、何条かの枝を垂らしている樹木の傍に立っている。木の枝には、それぞれの人物の持ち物であるらしい水瓶と鞄様の物が架けられてあり、僧は大きな団扇を、女は大きな枝をもっている。

なるほどこれは恰好な匿し穴だと行徳は思った。

新潮文庫版表紙

この耳洞が、現在の第十七窟であることは明白です。

この件（くだり）は、李元昊指揮する西夏軍に対する漢人部隊の叛乱という場面、沙州城の混乱の中での出来事です。

沙州の太守曹賢順の弟・延恵は言います。（傍線は編集委員）

「瓜州の時はまだこの沙州という逃げ場所があった。併し、この沙州の場合はもうどこにも逃げ場所はない。東からは西夏が、西からは回教徒がやって来る。自分はここでこの椅子に坐っているしか仕方がないではないか」

だから、井上靖さんも、回教徒の進攻は先刻承知なのです。

陳舜臣『敦煌の旅』より

「秘宝顚末」の章より抜粋引用します。傍線は編集委員の加筆。

河西を席巻していた西夏軍が、敦煌を占領したのは、一〇三六年のことでした。それまでの敦煌は帰義軍曹氏の支配下にあったのです。河西の主要オアシスが、つぎつぎと西夏の手におち、もっとも西端にある敦煌も、その運命が風前の灯となったとき、人びとはありがたいお経や文書を、「野蛮人」から守るために、それらをこの小さな耳洞に押しこみ、壁を塗ってわからぬようにしたのでしょう。なにぶんにも、そのいきさつは記録されていませんので、推理するしかありません。いま述べた、兵乱を避けてかくしたという説が、もっとも有力とされています。

西夏の侵攻に備えたという説の弱点は、やはり西夏が熱心な仏教信者の集団だったということです。いくら情報の伝わりにくい時代であるといっても、タングート族は敦煌の近くに、長いあいだ住んでいたしたから、仏教信者であることぐらいわかっていたでしょう。

このころ、西のほうにイスラム教国のカラハン王朝がおこり、しだいに東進しつつありました。それにたいする予防策であったというほうが説得力があります。イスラム教政権なら、仏教関係のものを破壊するおそれがあるでしょう。

（読売新聞社『敦煌の旅』p.228-230）

敦煌の石窟に何万点という古文書や画巻がかくされた背景について、陳舜臣さんは右のようにおっしゃっています。確かに理屈はそうですが、西夏が仏教徒であるから経典は安全と言えないのが「戦火」です。井上靖『敦煌』をどう読むかは、読者の自由です。

■第16窟、17窟については『紙の道』にも記述があります。本通信第34号で言及していますので、そちらも併せてお読み下さい。

ところで、上の枠内、画像中央の洪べン座像は、陳舜臣さんの一九七五の訪問以降、八四年の再訪までの間に他所で見つかり、この所定の場所に戻されたのです。従って、当然、井上靖『敦煌』には、この座像の記述はありません。

この間の事情については「秘宝顚末」に「付記」されています。

（同 p.242-243）

平凡社版『敦煌の旅』より

1972年10月 「中国『再会』の旅」

陳舜臣さんは、1972年10月6日から同月末まで、日本赤十字社が発行する証明書による「探親」という形で、母親に同道、弟・介臣さんも同行、初めて中国を訪問します。新聞記事の小見出しでは「帰国」と表現されています。北京では、1953年、祖国建設の情熱に燃えて中国に渡り、当時、北京放送勤務だった妹の妙玲さんに会い、西安では半坡(はんぱ)博物館を訪ねたりしました。

ここに取り上げたのは、旅行後間もない、11月16日、17日、朝日新聞夕刊の記事です。

何カ所か活字起こしをして転載しました（下の枠内）。小見出し及び傍線は編集委員の加筆です。

中国「再会」の旅　陳舜臣①
ゆったり、納得させる
知識欲の熱気ひしひし
自己的人

中国「再会」の旅　陳舜臣②
胸に迫る祖先の大地
初の帰国で旧知の感動
一望千里

妹さんの息子に詰問される

「舅々(チュウチュウ＝母の兄弟)、どうして領帯(ネクタイ)をつけて来なかったんだい?」

私は北京で妹の息子の十歳になる坊主から、そんなふうに詰問された。日本からおじさんが来る。別世界から来るのだから、とうぜん別世界の人間らしい服装をしているだろう、と期待していたのだ。

初めての土地なのに、どうして「再会」?

さて、このたびの旅行だが、北京の故宮、八達嶺の長城、西安郊外の華清池など、みな写真でなじみの風景だし、そこを舞台に活躍した史上の人物とも、浅からぬつき合いがあると、自分ではおもっている。だから、そのような場所に、私は完全に予想外のものはなに一つ発見しなかったといえる。はじめて見る土地なのに、「再会」というかんじのほうがつよかった。感慨がなかったのではない。いたるところで、私は深い感動を受けたが、それは久しく別れていたものに再びまみえるよろこび、と表現すべき性質のものだった。

センチメンタル・ジャーニー

長沙から北京へむかう機上から、私は長江(揚子江)、洞庭湖、そして黄河をみた。夕陽をうけて、まるで砕かれたガラスの破片が黄金色にきらめいて散乱したようにみえるのは、おそらく用水池の群れであろう。数千メートルの高度から、人間の営みを見おろす。この土地では太古から、わが祖先が生きる営みにいそしんできたとおもうと、胸が詰まりそうになる。まるでセンチメンタル・ジャーニーであった。

補足1■陳さんは『青雲の軸』で、主人公俊仁が一九三八年七月の神戸大水害を目の当たりにするくだり、

俊仁はあたりを見まわした。彼はこのとき、目の前の濁流から、ふと黄河や揚子江を連想した。(こんな色だろうか?)まだ見ぬあこがれの祖国の山河。

と表現しています。

補足2■陳さんは、三蔵法師と祖先が同じ、ルーツは中原、潁川のほとりとおっしゃっています。(集英社『陳舜臣中国ライブラリー25』「天竺への道」)

陳さんの大陸への想い憧れの強さ深さはどこから来ているのでしょう。逆に台湾への想いについてはどうなのでしょうか。台湾を題材にした記述、作品は極端に少ないように思います。本通信第48号で取り上げた「詰問状」の所為というだけではないように思えます。